様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 23 日現在

機関番号：32429
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008～2010
課題番号：20791705
研究課題名（和文）　看護ケアとしての「動物介在」が入院患者に及ぼす効果とその評価システムの構築
研究課題名（英文）　Effects of animal-assisted therapy as nursing care on inpatients and establishment of an evaluation system
研究代表者
熊坂　隆行（KUMASAKA TAKAYUKI）
日本保健医療大学・保健医療学部・看護学科・准教授
研究者番号：80347385

研究成果の概要（和文）：
全国の病床数 200 床以上の病院 450 箇所に勤務する看護職員を対象に質問紙調査を行った。質問紙の回収率は、40.22%であった。患者の日常生活を評価する方法として「フェイススケール」「長谷川式簡易スケール」「日常生活自立度」などの回答があった。また、動物とのふれあいで活用できる評価方法についても、患者の日常生活を評価する方法と同様の結果が得られた。現在、得られた結果を検証するため、準備を進めている。

研究成果の概要（英文）：
A questionnaire survey was conducted on nurses working at one of 450 hospitals with ≥200 beds nationwide. The response rate was 40.22%. Common responses for methods of evaluating patients' daily lives included "face scale", "Hasegawa's dementia rating scale", and "the degree of independent living". In addition, similar responses were obtained for evaluation methods for use in interactions with animals. We are currently making preparations for verifying the obtained results.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学
キーワード：動物介在、看護ケア、入院患者、入院環境、評価システム

１．研究開始当初の背景

わが国の医療は、西洋医学の物理化学的アプローチが中心であり、併せて心理社会的アプローチが統合的に用いられている。その心理社会的アプローチの生物療法の中にペット療法、動物療法、動物介在療法が位置づけられている。この療法は、生き物とのかかわりを利用したもので、基本的生活リズムの回復、情緒的安定、自主性や意欲の向上、社会性の改善、社会生活・生活日常技能の獲得など、患者の自立と適応を高めることを目的とした療法である（樋口輝彦，2004）（坂田三允1，2005）。

これらの療法は、多くの専門職や協働するチーム医療の中で行うが、療法を行う場合、24時間、患者の入院環境を整え、患者の状況を把握し、看守っている看護師の役割が非常に大きい。患者の価値観の多様性を理解し、患者の気持ちに寄り添っていくために、それぞれの過去の生活観念に目を向ける必要がある。患者がどのような人物なのかをイメージしていくために、① どのようなことが好きなのか、② どのような趣味や特技をもっているのかなどの情報を集め、それらのことが患者にとって、いかなる意味をもつのかを考えていくべきである（坂田三允2, 2005）。

現代は、ヒト同士のコミュニケーションから安らぎを得ることが難しい時代とされている（横山章光, 1996）。この社会状況下で「ヒトと動物の絆」が重視され、ヒトが飼育し共に暮らしてきた歴史が長い動物との生活が注目されるようになった。

欧米の病院や医療施設では、ペットと面会することや同居を許可する病院が一般的に存在し、動物を介在した治療が盛んに行われ、報告されている。文献データベース「CINAHL」を使用し、キーワード「Pet Therapy」で検索したところ、2005年3月までに229件の報告があった。その対象者は、精神疾患の患者、小児、高齢者（特に認知症の高齢者）、障害者、ターミナル期の患者等であり、介在する動物はイヌやネコ、ウマ、イルカ等であり、これらは、医師が動物介在プログラムを計画し、身体的・精神的・社会的な面の向上に用いられている。

日本国内の介護・福祉系施設では、ボランティアによる動物との「ふれあい」を目的とした、動物介在活動（Animal Assisted Activity：AAA）が盛んに行われている。しかし、医師の治療プログラムに基づき精神や機能治療を目的とした、動物介在療法（Animal Assisted Therapy：AAT）は、一般的な治療法として用いられない現状にある。その理由は、① 動物が保有する人獣共通感染症やアレルギーの問題、② ヒトへの攻撃等の事故による損傷の問題、③実際に病院で行った伴侶動物との面会や同居、ふれあい活動の報告が少ないこと、④ 日本における動物介在の活動や治療は獣医療関係の専門家が行っていることが多く、病院スタッフ（AATを行う場合は特に医師）の理解と技術がないこと、⑤ 患者と病院スタッフに対する動物に関する認識、要望等の調査が行われていないこと、⑥保険適用外の治療行為であるため患者側の経費負担が莫大であり、ボランティア活動に依存せざるを得ないなどの問題点を抱え、普及への道は閉ざされたままである。

私は、動物が好きな患者にとって、「動物がいる入院環境を整えること」も看護ケアのひとつであり、基本的生活リズムの回復、情緒的安定、自主性や意欲の向上、社会性の改善、社会生活・生活日常技能の獲得など、患者の自立と適応を高めることに繋がり、それは、生活の質（Quality Of Life：QOL）の向上に結びつくと考え、保健師助産師看護師法第5条、第37条に定められる「医師の指示がなくてもなし得る療養上の世話」という看護独自の業務として、「動物とのふれあい活動」「伴侶動物との面会や同居」を推進してきた。

これまで、第一段階として、①動物ふれあいの報告が比較的多い介護・福祉関係の施設での動物とのふれあいの要望調査、ふれあい活動、ふれあいによる施設利用者への影響、②病院に入院中の患者に対して、動物とのふれあい、伴侶動物との面会や同居の要望調査、③全国の慢性期病棟を有する病院の看護師に対して、動物とのふれあい、伴侶動物との面会や同居の要望調査を行い、動物とのふれあい、伴侶動物との面会や同居に強い要望があることが明らかとなった。

第二段階として、①感染症の問題が少ない精神科病院での動物とのふれあい活動、②総合病院緩和ケア病棟における動物とのふれあい活動を行い、患者に及ぼす効果について検証し、なんらかのプラスの効果を及ぼすことが明らかとなった。

評価としては、体温、脈拍、血圧などの生理学調査、動物とのふれあい前後におけるスケール調査、行動分析、対象者へのインタビューなどを行ってきた。第一に患者の負担とならないような評価方法を検討し実施してきた。また。なるべく、動物とのふれあい活動以外の要因が関係しないように活動直前・直後に実施してきた。この「動物がいる入院環境を整えること」という看護ケアを浸透させるためには、ケアする者にとって評価が行いやすく、明確でなければならない。患者の大部分の入院中の日常生活の援助をしているのは看護師であり、動物とのふれあいの要望、伴侶動物との面会や同居の希望があった場合、準備、計画、実施、評価をすることは看護師の役割となることが十分に考えられる。

＜参考・引用文献＞

坂田三允1(2005)：精神看護エクスペール 精神看護と関連技法，中山書店，2-155
坂田三允 2(2005)：統合失調症・気分障害をもつ人の生活と看護ケア，中央法規出版，

19-167
樋口輝彦(2004)：統合失調症，新興医学出版社，1-52
横山章光(1996)：アニマルセラピーとは何か，日本放送出版協会，12-382

２．研究の目的

動物の好きな患者への、入院生活における「環境を整えるという看護ケア」のひとつとして、「動物とのふれあい活動」「伴侶動物との面会や同居」を確立し実施するため、その「動物とのふれあい活動」「伴侶動物との面会や同居」という看護ケアを評価する方法を検討する。また、その「動物とのふれあい活動」「伴侶動物との面会や同居」という看護ケアを実際に実施し、その効果を検証し、評価方法の信頼性と妥当性を探り、構築することを目的とした。

３．研究の方法

(1)調査方法

本研究は、「環境を整えるという看護ケア」のひとつとしての「動物とのふれあい活動」「伴侶動物との面会や同居」の評価システムの構築を目的としている。これまで、さまざまな調査研究を行い、病院へ動物導入の可能性は見えてきたが、その活動の評価方法が曖昧である。その原因として、①患者への負担の増加、②ケアする者（実施者）において、評価方法が日常的に使用されている評価方法でないため、時間がかかってしまったり、評価ができなかったりといったことが起こっている。これがこの看護ケアが浸透しない原因の一つであると考えられる。このようなことから、①評価をする場合、患者の負担を最小限にすること、②看護師が日常的に使用している評価方法を活用することが最適と考えられる。

このようなことから、

① 看護師が日常的に患者に活用している評価方法を探る。
② その評価方法のなかで、「動物とのふれあい活動」「伴侶動物との面会や同居」のアプローチに活用できる評価方法を検討する。
③ その後、「動物とのふれあい活動」「伴侶動物との面会や同居」のアプローチを希望する病院を調査する。
④ 希望があった病院へ試験的に「動物とのふれあい活動」「伴侶動物との面会や同居」を導入し、その評価方法を活用し、患者に及ぼす効果を評価する。
⑤ 評価方法の信頼性と妥当性を探る。

(2)実施場所と研究対象

① 実施場所

調査方法の①と③に関しては、全国規模の調査を行う。現在、病院の機能分化と性格づけの明確化が推進されており、高度医療主体の急性期認定病院においては患者の在院日数は短縮傾向にある。しかし、慢性期病棟を有している病院は患者の疾患の症状や高齢の患者が多いことから、在院日数が増加する傾向にある。また、患者は疾患の症状が安定・軽快すると、病院の機能分化と性格づけ、家族の家庭における看護・介護が困難なことから、療養型病院、リハビリ専門病院への転院が急増している。このようなことから、このような看護ケアを希望する患者は、急性期病院ではなく、慢性期病棟を有する病院、療養型病院、リハビリ専門病院、緩和ケア病棟を有する病院ということが以前の調査(熊坂隆行，2006)から明らかになっていることから、慢性期病棟を有する病院、療養型病院、リハビリ専門病院、緩和ケア病棟を有する病院とする。

調査方法の④に関しては、調査方法の③で希望があった病院とする。動物とのふれあい活動の希望の場合は、現在、共に活動を行っている動物団体の全面的な協力を得、感染症チェックが徹底的にされている動物を導入し、その効果を検証する。伴侶動物との面会や同居を希望される場合には、獣医師による健康診断を受け、病院内に動物を導入し、その効果を検証する。

② 対象

調査方法の①、③に関しては、全国の慢性期病棟を有する病院、療養型病院、リハビリ専門病院、緩和ケア病棟を有する病院に勤務する看護師を対象とする。

調査方法の④に関しては、調査方法の③で希望があった病院に入院している患者を対象とする。

＜引用文献＞

熊坂隆行、升秀夫、藤村友佳織、山田好秋(2006)：病院に勤務する看護師への調査による動物介在についての見解～看護師の動物に対する嗜好、動物が介在することに対する認識や考え方の傾向にもとづいた調査研究～、日本動物看護学会会誌、11(1)、49-59

４．研究成果

2008年度は、看護師が日常生活援助の中で

患者に活用している評価方法を探り、その評価方法のなかで「動物とのふれあい活動」「伴侶動物との面会や同居」のアプローチに活用できる評価方法を検討することと「動物とのふれあい活動」「伴侶動物との面会や同居」のアプローチを希望する病院を調査するため、「看護師が日常生活援助の中で患者に活用している評価方法と先行研究を探るため文献検索」「検索をした文献を用いて、研究協力者らとの意見交換、検討会」「全国の慢性期病棟を有する病院、療養型病院、リハビリ専門病院、緩和ケア病棟を有する病院に患者の日常生活を測定している評価方法を調査するための調査票の検討、また動物とのふれあい活動、伴侶動物との面会や同居に関しての希望調査のための調査票の検討、作成」を行った。

2009年度は、2008年度から検討していた、病院で看護師が患者の日常生活を測定している評価方法に関する調査票と動物とのふれあい活動、伴侶動物との面会や同居に関しての希望の調査票を完成させ、所属大学の倫理委員会に研究計画書を提出し、承認を得、全国の病院に質問紙調査を行った。調査を行った病院は、社団法人全国自治体病院協議会会員施設情報データベース（http://www.jmha.or.jp/index.php）を活用し、平成21年8月14日現在で、許可病床数200床以上の病院450箇所を対象とし、1施設に3通ずつ質問紙を送付した。質問紙の回収率は、1350通送付し543通であった(40.22%)。

2010年度は、質問紙調査の結果をまとめた。患者の日常生活を評価する方法として「フェイススケール」が最も多く、その他「VAS(Visual analogue scale)」「GDS-15(Geriatric Depression Scale)」「Vitality index」「長谷川式簡易スケール」「日常生活自立度」などの回答があった。また、動物とのふれあいで活用できる評価方法についても、患者の日常生活を評価する方法と同様の結果が得られた。現在、学会発表や論文投稿の準備を進めている。

また、適宜、連携研究者らとの意見交換、検討会を開催し、実際に病院や施設で単発的に動物とのふれあい活動を行っているクラブなどを訪問し、「動物とのふれあい活動」「伴侶動物との面会や同居」に活用できる評価方法を探った。現在、全国の病院に勤務する看護師に行った調査結果から得られた評価方法、実際に病院や施設で単発的に動物とのふれあい活動を行っている活動に参加した結果を踏まえ、その評価方法を検証するため、準備を進めている。

５．研究組織

(1)研究代表者
熊坂　隆行（KUMASAKA TAKAYUKI）
日本保健医療大学・保健医療学部・看護学科・准教授
研究者番号：80347385

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
升　秀夫（MASU HIDEO）
筑波大学大学院・人間総合学科研究科・助教
研究者番号：70190345

片岡　三佳（KATAOKA MIKA）
徳島大学大学院・ヘルスバイオサイエンス研究部・准教授
研究者番号：30279997